

聖書：創世記 20：1～18

説教題：これは私の妹です

日時：2023年10月1日（朝拝）

アブラハムは今日の箇所です。以前と同じ罪を犯してしまいます。以前の出来事は 12 章 10～20 節に記されました。アブラハムは飢饉が起こったため、エジプトへ一時逃れて、そこで妻サラのことを私の妹だと言いました。妻サラが美しい女性だったので、彼女と結婚していると知られたら自分は殺されるのではないかとアブラハムが恐れたからでした。この結果、サラは何とエジプトの王ファラオに召し入れられてしまいます。詳しい内容は 12 章をご確認いただければと思います。その状況に神が介入くださり、憐れみによってサラとアブラハムは救い出されました。それとほとんど同じことが今日の箇所に記されています。そこである人は、もともとは一つの出来事が二つの伝承となり、こうして重複して記されることになったのではないかと見ます。しかしそれはあまりにも人間的な解釈であり、人間は同じ過ちを繰り返すはずはないという前提に立っています。しかし本当にそうでしょうか。私たちは同じ過ちを繰り返さないでしょうか。一度失敗したことをまたやってしまうことがあるのではないのでしょうか。むしろあのアブラハムが同じ失敗を繰り返したというところに今日の箇所の意味とメッセージがあるのではないかと思います。

それにしてもです。かつて同じ罪を犯したのは主からの召命を受けて主に従い始めた直後のことでした。約束の地に入ってからすぐ、アブラハムが 75 歳の時のことです。その一方、今日の箇所のアブラハムは 99 歳、来年には 100 歳になろうという時のことです。25 年近くも主に従う歩みを彼はして来ました。その彼がまた同じ過ちを犯したというのです。私たちはここに信仰の父アブラハムも超人ではなかったことを知ります。彼も私たちと同じような過ちを犯す人間でした。私たちと同じ弱さを持つ人でした。そのことを受け止めて彼の信仰の生涯を改めて考える時、逆に彼の偉大さが見えて来ます。彼は決して弱さを持たない人ではありませんでした。何の困難もなく主に簡単に従って行けた人ではなかったのです。私たちと同じ弱さを持つ生身の人間が、私たちのモデルとなるような立派な信仰の生涯を歩み通したのです。このことは私たちにチャレンジを与えるものであり、私たちの信仰の歩みを鼓舞するものです。しかしだからと言って今回のことが軽く見られて良いわけではありません。先にも述べましたように、彼は 25 年近く、主を知る信仰生活を積み重ねて来ました。なのにより

んど同じと言っても良い罪を犯したのです。この点で彼が責められなければならないというのは事実です。

問題はどこにあったのでしょうか。今回の出来事が起こったのはゲラルという場所でした。なぜアブラハムがこの地へ移動したのかは良く分かりません。新しい場所で寄留者として生活するにあたり、色々な不安が彼にはあったのでしょうか。彼は後にゲラルの王アビメレクに責められた時、11 節でこう言います。「この地方には、神を恐れることが全くないので、人々が私の妻のゆえに私を殺すと思ったのです。」 かつて妻サラは見目麗しい女だと言われていました。あれから 25 年、この時のサラは 90 歳前後であったと考えられます。当時の寿命は今日の 1.5 倍以上あったように思われますので、サラは今日で言えば 50 代くらいの人に見えた可能性はあります。彼女はなおも人々の注目を集め得る人だったのでしょう。アブラハムによれば、彼が旅する地域では外国人女性を誘拐することは普通にあったようです。そこで彼はゲラルに来た時、恐れたのです。しかしそのことが問題だったのでしょうか。周りの環境、周りの人々が悪いのでしょうか。そうではありません。問題はアブラハムの信仰にありました。神は 12 章 3 節で「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう」と言っておられました。主がアブラハムを守るという約束です。この約束を信じていないところに、ここで問われるべき第一の問題があったのです。アブラハムは 13 節で、今回のように振る舞うことは旅の最初からの方針だったと言っています。

「神が私を父の家から、さすらいの旅に出されたとき、私は彼女に、『このようにして、あなたの真実の愛を私に尽くしてほしい。私たちが行くどこでも、私のことを、この人は私の兄です、と言ってほしい』と言ったのです。」 ここに信仰の問題が見え隠れしています。13 節最初の「神が私を・・・さすらいの旅に出されたとき」という表現に何か引っかかるものを私たちは感じないでしょうか。これは神がともに歩んでくださる素晴らしい旅、祝福の旅ではなかったのでしょうか。しかし彼はこの旅をさすらいの旅、放浪の旅と呼んでいます。確かに人間的な目で見れば不安材料は沢山あります。それは危険の多い旅です。安定しない旅です。弱い立場に置かれ続ける旅です。彼はそのことばかりを見つめて、神は守ってくださらないかもしれないから、その時のために、自分で自分を守るための方便として、妻に自分のことを兄と言ってほしいと頼んだのです。確かに 12 節で言い訳していますように、アブラハムとサラは異母兄弟だったようです。後に律法において同じ父を持つ兄弟姉妹は結婚してはならないと禁じられますが、それ以前はこのようなことがあったようです。しかしだからと言

ってこの言い訳は認められるものではありません。アブラハムが言わんとしたことは、サラは私の妻ではありませんということです。アブラハムはこれまでずっとサラとの関係をこのように言って来たわけではないと思いますが、今回ゲラルに寄留した時、彼は恐れたのです。そこで前にサラと交わした約束を思い起こして、その方法により、何とかこの場をしのごうとした。ですから根本的な問題は彼が神の守りを疑ったことです。神は私を守らず、この状況では私は殺されるかもしれないと恐れた。一言で言えば不信仰の罪です。神は私に対して良い方であられ、この状況においても私に真実を尽くしてくださるということを信じなかった。だから人間的方法で切り抜けようとした。ウソをついてでも自分を守ろうとした。この結果、またしても最悪の事態が生じます。サラはゲラルの王に召し入れられてしまいます。サラは独身であるかのように証言したため、王のところ連れて行かれても何も言えません。こうして妻サラはアブラハムの手が及ばない所に行ってしまった。来年サラに男の子が与えられるという大切な時期だったのに、すべてがここで終わってしまうという危機的状況を自ら招いたのです。

さてアブラハムはこのように神を疑い、自分の知恵と力でこの状況を乗り切ろうとしましたが、実際の神はどのような方であられたとこの箇所は私たちに語っているのでしょうか。皮肉なことに、ここにはアブラハムが信じなかったこと、すなわち神はアブラハムに対して善なる方であり、ご自身の約束に従って彼を守るために常に働いている方であるということが示されています。三つのことに注目します。まず主はアビメレクに働きかけてサラを守ってくださいました。私たちが神の立場にあつたらどうでしょうか。ご自分を信じずに、偽りを述べてこの場を乗り切ろうとするアブラハムを見て、彼を見捨ててもおかしくありません。いよいよ来年約束の子を与えるという時期に来ているのに、このような姿をさらけ出すとは！と怒り、彼を見放し、彼が選んだ道に遺棄したとしてもおかしくありません。しかし神は何とアビメレクに働きかけてサラを救い出そうとされます。アビメレクは最初、自らの潔白を主張しました。3節以降の主とのやり取りを見ると、むしろ異邦の方がしっかりした道德観を持っているように見えます。ここには神の一般恩恵の光が見られます。神は罪に堕ちたこの世が最悪の状態に至らないように、神のかたちに造られた人間がなお神の光を反映して生きるように恵みをもって導いておられます。これに照らすと、先に見た11節のアブラハムの言葉はあまりに失礼な言葉となって来ます。自分自身が道徳的に問題のある行動を取りながら、そのことは問わず、他人の罪だけ非難する。このようなこ

とがないように私たちは自分を戒めなければなりません。主はこのやり取りを通して、アビメレクにサラを返しなさいと言われました。これを受けてアビメレクは彼女をアブラハムに返します。ここに神がアブラハムに対して真実な方であり、彼を守ってくださる神であることが十二分に示されているのではないのでしょうか。アブラハムが神をそのような方とは信じず、疑った時でさえもです。神はアブラハムに真実であり続けられました。

神がそのような方であることは、続いてアブラハムがアビメレクに呼び出され、叱られた時にも当てはまります。二つ目にそのことを見ます。主はアビメレクの夢の中に現れ、彼が罪を犯さないようにと介入されました。しかしそれができるのなら、なぜ神はもっと早くそのことをなさらなかったのでしょうか。もっと早くアブラハムの夢の中に現れて、わたしがあなたを守るからサラを妹だとは言わないように！と仰てくだされば良かったのではないのでしょうか。そうすれば今回の事件は回避できたのではないのでしょうか。しかし主はそうはされませんでした。なぜでしょう。それはアブラハムがこの出来事を通して自分の弱さに直面するためです。自分の知恵と力に信頼する歩みは空しいものであり、誤りであることをもう一度良く学ぶためです。この学びを通して真に主により頼んで生きる者となるためです。つまり神は私たちの人生がうまく行くことに関心があるのではないのです。もしそうなら、神は事が起こる前にアブラハムの夢の中に現れて未然に防ぐことはできました。しかしあえてそうはなさらず、アブラハムが今回のことにぶち当たるようにされました。彼がアビメレクに呼び出され、叱責され、辱められるようにされました。それは神が私たちの信仰の成長に第一の関心を持っておられるからです。試みを経て、より強い信仰を持つ者へと成長することを願っているからです。そのためにこのようなところを通させたのです。アブラハムはこの後、さらなる試練の中を通らされます。間もなく見る創世記 22 章で愛する一人子イサクさえもささげよと命じられます。それを乗り越えて真の祝福に至るように、その目標に向かって神はここでもアブラハムを導いておられたのです。ここに神が私たちの思いを越えて、私たちに対して善なる方であられること、それゆえ信頼すべきお方であることが示されているのではないのでしょうか。

三つ目に神はアビメレクを通して多くの贈り物をアブラハムに与え、また彼がアビメレクのために祈るように導かれました。ここに本来の召命へと立ち返らせてくださった神の姿が示されています。創世記 12 章 3 節で主は「地のすべての部族は、あな

たによって祝福される」と言われ、アブラハムとアブラハムに続く神の民が全世界に神を証しし、神の祝福を取り次ぐ器となるべきことを語られました。アブラハムは自分の人間的知恵に頼った結果、祝福どころか迷惑を周りにかける者となりました。しかし神はこうして他の国々のために祈り、その祝福のために仕えるという本来の使命を果たす者へと回復させてくださったのです。ここにもアブラハムに対して善であられ、彼の祝福のためにいつも見守り、すべてのことを通して働いてくださっている神の姿が示されています。アブラハムがこうして他の国々のために祈り、奉仕できるのは彼の立派さによるのではなく、ただ神の憐れみと恵みとによることがここに示されています。同じく私たちにこの奉仕ができるのも、ただ神の憐れみと恵みとによることを受け止め、主に一層より頼む者でありたいと思います。

今日の箇所から学ぶこと、その一つは私たちも色々な危機的状況に置かれることがあります。そこで問われているのは私たちの信仰であるということです。周りの状況が問題なのではありません。私の信仰が問われています。特に神は私に対して良い方であるのか、私に良くしてくださるのか、約束を果たしてくださるのか、私を見守り、導いてくださる方なのか。この神を見失う時、私たちは人間的な方策に走り、御言葉に反することさえも行って自分で自分を守ろうとします。しかしそうであるはずありません。神は私たちを見守っておられます。主権をもって導いておられ、必ず良いことに至るように働いてくださっています。その信仰に立つように！と今日の箇所は私たちを励ましています。どんな状況でも神こそ私たちが信頼を置くべき第一の方であり、その方に祈り、その方に従う歩みへ進む者であるように！と。

そしてもう一つ今日の箇所から思われることは私たちも失敗することがあるということです。あのアブラハムさえ、同じ失敗を繰り返しました。私たちも同じ弱さを持つ者です。そういう現実には信仰者にもあるということに正直に向き合わされます。その結果、私たちもアブラハムと同じように色々な苦しみを報いとして刈り取っているかもしれません。しかしそれでも神は私たちを見捨ててはおられません。神はそのことを通して私たちが大切な学びをするようにと導いておられます。特に自分の知恵と力に頼って歩んでも何にもならないこと、主にこそ信頼して歩むように！と。ですからもし誤った道に進み、その刈り取りをさせられている自分であることを思うなら、主の御前で悔い改めたいと思います。主はそのことを通して私たちを成長させようとしてくださっています。大切な学びを経て、今度こそ主を信じ、主に従う道を選び取

る者であるようにと。そうしてこれから先、どんな状況に置かれても、主は良いお方であり、私を見守り、必ず良きに導いてくださる方であると告白して、主に信頼し、主に祈り、主が備えていてくださる最善の祝福の道こそを進む者へと強められ、導かれる民でありたいと願います。